



菅波 茂

「国際貢献」のコンセプトを明確にするためには、このコンセプトが登場した背景の理解が重要である。似て非なるコンセプトとして「国際協力」がある。

「国際貢献」という単語が世の中に登場したのは、90年にイラクがクウェートに侵攻して発生した湾岸戦争が契機である。日本は米軍を中心とする多国籍軍に兆4000億円もの資金を提供した。にもかかわらず、クウェートが米国の新聞上で感謝を示した30カ国に日本の名はなかった。顔が見えない日本。パニックが日本を襲った。

金だけではない「顔が見える日本」としての「国際貢献」が必要である。直感的に思いついたのが、未成熟なNGO

を育成することだった。91年から外務省はNGO支援制度を、当時の郵政省は国際ボランティア貯金を発足させた。熟慮すべきことが2点ある。最初は誰にする「国際貢献」なのか。次にNGOとは何なのか。残念なのは、この分析がないがゆえに「国際貢献」が迷走し、いまだにNGOの育成に成功していないことである。

最初は誰に対する「国際貢献」なのかについて考えたい。米国もクウェートも啓典の民である。啓典の民とは旧約聖書、新約聖書、そしてコーランなどを信仰する人たちである。魂の救済とは、預言者の言葉を信仰することである。

ひるがえって、日本は非啓典の民である。仏教、儒教、ヒンズー教などである。魂の救済とは宇宙の真理に修行に

「啓典の民」を政治顧問に

よって少しでも近付くことである。簡約すれば、啓典の民は言葉によるメッセージを、非啓典の民は行為を第一義とする。決定的な違いがある。

「お金では達成できない国際貢献」とは、非啓典の民である日本人が、啓典の民とのコミュニケーションを確立することである。世界を動かしているのは啓典の民である。彼らとのコミュニケーションは重要である。

次にNGOについて考えたい。啓典宗教を母とする子どもがNGOである。啓典宗教は魂の永遠性を、NGOは命の普遍性を活動の中心にしている。この母と子の共通性は言葉によるメッセージにある。いかにすれば、このメッセージを理解することができ、コミュニケーションを確立できるのか。結論は啓典にある言葉とメッセージを活用することである。その方法は、啓典の民を取り込むことしかない。NGOの組織が多国籍化することである。日本発のNGOのほとんどが日本人による運営である。これが日本のNGOの限界である。「国際貢献」への関与度が低い理由でもある。外務省のNGO支援制度や郵便局の国際ボランティア貯金により、日本のNGOの多国籍化を推進するのが本来の趣旨への第一歩である。

日本政府はいかにするべきか。「ルック！ 明治」である。欧米による植民地化をまぬがれた明治の先達に学べ。啓典の民を政治顧問として雇用すべし。サッチャーを、ゴルバチョフを、ヤマニを。これにて官民共に推進する「国際貢献」の枠組みの完了である。
(アジア医師連絡協議会代表、題字は筆者)